方向

第一六九号　一九九五年三月二五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

李賀歌詩編

（訳注稿　四）

1995 03 21　原田憲雄

（一〇一二―一〇一三）

感想　二首

詠懐二首

〔懐（おも）いを詠ず　二首〕・詠懐二首　感想を歌った二首で、一首は漢代の文学者司馬相如（しばしょうじょ）に托し、一首は渓の魚に托し、現在の貧しいけれども自由な生活を、みずから慰めている。

一

（一〇一二）

長卿が思いにふける茂陵では　〇一　長卿懐茂陵
みどりの草が石の井戸に垂れさがる　〇二　緑草垂石井
琴ひいて女房の文君みれば　〇三　彈琴看文君
春風がそよろと鬢の影を吹く　〇四　春風吹鬢影
梁王だって　武帝だって　当人を　〇五　梁王與武帝
こっぱみたいに見捨てておいて　〇六　棄之如斷梗
わずかに遺した一巻の《封禪文》は　〇七　唯留一簡書

金泥でとじ　太山の頂にお供えだ

○八　金泥太山頂

○一〔長卿　茂陵に懐う〕　・長卿　司馬相如（前一七九？―前一一七）の字。成都（四川）の人。景帝に仕え武騎常侍となったが不満だった。景帝の弟の梁の孝王が来朝したとき、従った遊説の士と意気投合し、辞職して孝王の客として梁（河南商邱）に遊び、「子虚賦」などを著した。王の死後、帰郷したが貧しく、友人の招きで臨邛にゆき、富豪の卓王孫の宴に招かれ、寡婦となって戻っていた娘の卓文君を琴の弾奏で誘惑して駆け落ちし、食うに困って料理屋をひらき、自分が板前、文君が客を接待し、大評判になった。閉口した卓王孫が、持参金をやって正式に結婚させた。武帝に招かれ「天子遊猟賦」を作り大いに喜ばれ、中郎将に進み、西夷に使いしたこともあるが、国家の大事に与ることはなく、文帝の園令（陵園長）となり、病気によって免ぜられ、茂陵に住んだ。その危篤を聞いた武帝が、蒼書の散逸を惜しんで家を探しに行かせた。使いが着いたときには既に死んでいた。「文章など書くしりから人が持ち去り、なにもありません。ただ死んだ後、きっと必要になろうから尋ねられたら献上せよと言っていました」といってさしだしたのが、「封禅文」だった。封禅とは天子の行なう祭りで、土を盛って壇を造り天を祭ることを封といい、地を払って山川を祭ることを禅という。「封禅文」はその祭りに報告する文章である。管子に「いにしえ泰山を封じ梁父を禅するもの七十二家」といい、泰山を太山ともいう。秦の始皇が天下を統一して地方を巡狩し、前二一九年、太山に至って封禅し碑を建てたのが史上では顕著で、ついで漢の武帝が、司馬相如の死後八年の前一一〇年、太山で封禅した。司馬相如については史記と漢書に伝がある。　・茂陵　長安の西北の地で、後に武帝の陵がここに築かれた。

○二〔緑草　石井に垂る〕　・緑草　漢の成帝の愛人班婕妤はたいへんすぐれた女性だったが、妖艶な趙飛燕姉妹が宮中に入ってからは、皇后を擁護して遠ざけられ、うたった賦に「中庭萋として緑草生ず」の句がある。緑の草は天子の愛情を失った人の庭に茂るのだ。成帝の死後、婕妤は帝の園陵を守り、死んで園中に葬られた。班婕妤は司馬相如より後のひとだが、二人よりはるかに後代の李賀が、相如を歌うのに婕妤の言葉や故事を援用してもさしつかえはない。

○三〔琴を弾じて文君を看れば〕　・弾琴　むかし孔子の弟子の子夏は、窮居しても蓬戸のうちに弾琴して先王の風を歌う、といった（尚書大伝五）　相如は子夏のような篤儒ではないから、恋女房の文君を見るのだ。

○四〔春風　鬢影を吹く〕　・春風　宋玉が「春風に寤めて鮮栄を発す」（登徒子好色賦）といったが、この句はまさにそのように鮮栄だ。

○五〔梁王と武帝と〕　・梁王　漢の文帝の子、景帝の同母弟で、武帝の叔父だった梁孝王の劉武。母太后に愛せられ内乱の鎮定に功があった。宮室庭園を広大に営み、人材を集め、威勢は皇帝を凌いだ。

・武帝　景帝の子で、その後を嗣いだ劉徹（前一五六―八七）版図をほぼ今の中国と同じ地域にまで広げ、儒教を国教とし、以後清朝が滅びるまでのその地域の国家の体制の基礎を築き、先立つ秦の始皇、後の唐の太宗とともに最も偉大な皇帝である。李賀は、しかしこれらの皇帝を手放しに讃美したりせず、むしろ厳しく批評する。この作がその一例。

○六〔之を棄つること断梗の如し〕　・断梗　木のきれっぱし。梗はとげのある木。梁王は司馬相如を棄てたわけではないが、おもしろい文章を書く男、というぐらいにしか考えず、重要な地位におかなかっ

た点では、武帝と同様だった。王維哲は、司馬相如が梁王と武帝を棄てて死んでしまった、とする。おもしろい解釈だが、梁王が司馬相如より早く死んでいるから、無理だろう。

○七〔唯だ　一簡の書を留め〕　・一簡書　一通の書き物。宋書に「一簡の内、音韻尽く殊なる」（謝霊運伝）の例もあるから「一の簡書」とも読める。封禅文は、黄金の簡策に書し、石函に納め、その蓋に玉で題を刻み、錠を掛け金泥で封じるから、一種の簡書である。

○八〔金泥す　太山の頂に〕　・金泥　金を水銀に交ぜて作った膠状のもので、貴重なものを封印するときに使う。「金泥す太山の頂に」とは、金泥で封印して太山の山頂に秘蔵した、の意。「太山」を錦嚢集は「泰山」とする。意味は同じ。

二　（一〇一三）

夕方になり書き物をやめると　○一　日夕著書罷
霜降るみたいに落ちる白髪　○二　驚霜落素絲
鏡の中の自分がいささか滑稽だ　○三　鏡中聊自笑
《南山の寿》なんてがらかね　○四　詎是南山期
頭には束ねのきれも巻かず　○五　頭上無幅巾
身にはキワダで染めた野良着　○六　苦蘗已染衣
ごらん　清らかな谷川の魚　○七　不見清溪魚
水飲んで自ままに気ままさ　○八　飲水得自宜

○一〔日夕　書を著し罷む〕　・日夕　夕方。陶淵明「山気日夕佳なり」（飲酒）　・著書　書き物をする。史記の老子伝で、関尹令喜が「きみまさに隠れんとす、強いてわが為に書を著わせ」という。李賀は老子をきどるわけではないが、隠れ住む意はこめたのだろう。著書を錦囊集などは「看書」とする。それなら読書。

○二〔驚霜　素糸　落つ〕　・驚霜　激しい霜。　・素絲　白糸。江淹「徒らに素糸の質を慙ず」（雑体）ともに白髪の形容。　・この句には謝朓「清霜素枝に落つ」（将遊湘水尋句溪）が影響していよう。

○三〔鏡中　聊か　自ら笑う〕　・鏡中　杜甫「鏡中　衰謝の色」（覧鏡呈柏中丞）　・聊　陶淵明「聊か化に乗じて以て尽くるに帰せん」（帰去来の辞）　まあそのうち禿頭になるだろう、と苦笑するのだ。

○四〔詎ぞ是れ　南山の期ならん〕　・詎是　どうして……だろう。簡文帝「詎ぞ是れ良人征く」（秋閨夜思）　・南山　この語には、詩経の「南山の寿の如く、騫けず崩れず」（小雅天保）と陶淵明の「悠然南山を見る」（飲酒）が併用してある。詩経は、終南山の崩壊しないようにあなたの生命も子孫も永遠だ、といい、淵明は、菊を東の籬に採って悠然たる南の山を見る、というのだ。だが今の俺では、そのいずれも期待しようがない。

○五〔頭上　幅巾　無く〕　・頭上　曹植「頭上は金爵釵、腰に翠琅玕」（美女篇）　・幅巾　頭を包むひとはばの巾。古代は官職をもつ者は冠をつけ、庶民が巾で頭髪を束ねた。賀はそれさえつけていない。

○六〔苦蘗　已に衣を染む〕　・苦蘗　にがいキワダ。キワダはキハダともいい、山地に生じるミカン科の落葉喬木で、樹皮を黄蘗といい、黄色い染料とし、またその味は苦く胃腸の薬として用いられる。キワダで染めた布は僧の衣や、山着などに使われる。士人の衣服ではない。

○七〔見ずや　清溪の魚〕

○八〔水を飲みて　自から宜しきを得たり〕　・自宜　錦囊集などは「相宜」とする。意味の上では変わりはない。じぶんにはぴったり合った生活をしている、の意。

（作品番号　一〇一四）

柳惲の詩への追和

追和柳惲

〔柳惲に追和す〕　・追和　古人の詩に対して後世の人が唱和すること。その場合、古人の詩意をもとに、唱和者がいくらか自分の意向をまじえ、異なった表現を与えるのが普通で、李賀にもそのような作品「追和何謝銅雀妓」（三一一四）がある。ところが「追和柳惲」はふつうの追和概念を乗り越えて、もとの柳惲の詩の終わったところから、これを追いかけるように出発している。いわば追和の二乗を楽しんでいる。宋の蘇軾（東坡）は「いにしえの詩人に擬古の作あり矣。未だ古人に追和せしものあらざる也。古人に追和するは則ち吾に始まる」と陶淵明に追和した「和陶詩」を自賛している。追和の文字は使っても古人の作は擬古詩にすぎぬとの批評なのであろうが、かれより二五〇年まえの李賀がすでに古人を追和し、その作がここにいうような警抜な方法を駆使したものであることに、気づかなかったようだ。この詩については拙稿「補悲」（李賀論考）参照。　・柳惲　（四六五－五一七）字は文暢。河東（山西）解の人。詩文音楽にたくみで、斉の竟陵王にみいだされて法曹参軍、相国右司馬。梁に入って侍中となり沈約とともに新律を定め、武帝の「景陽樓に登る」詩に唱和して深く讃美され、累遷して

呉興の太守となった。しっとりとした政治をしたので、官民に慕われた。音楽のほうでも古曲を収集し、編曲し、琴で弾奏した。すぐれた唱和の、また追和の芸術家だった。李賀が追和した惲の作は、民謡風の「江南曲」で、次のようである。

汀洲採白蘋　　汀で白い睡蓮を採ってると
日落江南春　　日が落ちる　江南の春
洞庭有帰客　　洞庭から帰った旅人がいう
瀟湘逢故人　　「瀟湘であの人に出会ったぜ」
故人何不返　　「あの人はなぜ　返られませぬ
春華復応晩　　春の花が　もうしおれましょうに」
不道新知楽　　新しいひとの楽しみに触れないけれど
且言行路遠　　いうことは「なにしろ道が遠いので」

〔汀洲に白蘋を採る。日は落つ江南の春〕　・汀洲　砂州。　・白蘋　ひつじぐさ、睡蓮。この歌はその睡蓮をとる女のうたう体になっている。呉興の東南に白蘋洲という砂州がある。柳惲がそこでこの詩をつくったので名づけられたという。

〔洞庭帰客有り。瀟湘故人に逢うと〕　・洞庭　長江の上流、湖南にある中国第一の淡水湖。　・帰客　洞庭方面に旅して帰ってきた人。　・瀟湘　洞庭湖の南の、瀟水と湘水の合流点で、女神や美女の

地として知られる。・故人　なじみの人。ここでは旅人と女の共通の知り合い。この一句は旅人の言葉。〔故人何ぞ返らざる。春花復た応に晩なるべし〕　・この二句は、女の、旅人にぶつける言葉であろう。　・春華　春の花、女の盛り。

〔新知の楽しみは道わず。且つ言う行路遠しと〕　・お門違いながら女の激しい反問にぶつかって驚いた旅人の返事であろう。　・新知　故人の、瀟湘での新しい恋人。女の機嫌がよければべらべら喋るはずだったその恋人のことを、ごまかしてしまい、なぜ返らぬ、という問いに「行路遠」なにしろ道が遠いのでなあ……。「故人」だって逢って問いつめられたらするだろう言い訳である。

・以上の柳惲の詩を引用符で括っておいて、それをうけて賀の詩が始まる。

（一〇一四）

そう歌われた睡蓮は汀に白く　〇一　汀洲白蘋草
歌った柳惲どのは馬に乗って帰る　〇二　柳惲乗馬歸
江のほとりではサンザシが香ばしく　〇三　江頭櫨樹香
岸の上を胡蝶が飛んでいる　〇四　岸上胡蝶飛
盃の箬葉露を口にうつすのだが　〇五　酒盃箬葉露
琴も箜篌も合わせるひとのいぬ虚しさ　〇六　玉軫蜀桐虚
朱色の樓はみなとに通じ　〇七　朱樓通水陌
砂暖かくぴったり寄り添う女男の魚　〇八　沙暖一雙魚

○一〔汀洲の白蘋草〕　・本歌の第一句とほとんど同じだが、「採」がないことで、この句は眺める人の目に写る風景となる。その視点から本歌をふりかえると、ひとつの劇か映画だったような感じがする。

○二〔柳惲　馬に乗じて帰る〕　・眺めていて、睡蓮を刈り取る女の姿から「江南曲」の一首を作ったのは柳惲どの。呉興の太守。殿様だから馬に乗ってお帰りだ。　・この句に「柳惲」があるので、眺める人だった柳惲が、眺められる点景となり、それを眺める視点にある者の、視野に入る風景と、風景に対する感想が、以下に展開する。

○三〔江頭　檀樹　香しく〕　・檀樹　本歌の劇が終わると、作者柳惲は帰ってしまったが、江のほとりの檀樹は香しい。「檀」を、辞書は「しどみ」「こぼけ」というが、誤用だという植物学者もいるので、似た木で檀字を含むサンザシを訳語とした。中国原産の刺をもつ落葉の小潅木で、春、白い花をつける。詩に出てくる物の名が、今の辞典に出てくるそれと同じとは限らないので、状況に応じて選択するほかない。檀を毛氏本の注は「檀」とする。　・香　第一句の蘋草が第三句で檀樹となり、「白」の視覚が「香」の嗅覚に転移し、現実感が幻想に流れ込む。

○四〔岸上　胡蝶　飛ぶ〕　・胡蝶　荘子「むかし荘周、夢に胡蝶となる。栩栩然として胡蝶なり。自ら志に適するかなと喩しみ、周なるを知らざるなり。俄然として覚むれば、則ち蘧蘧然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶となれるか、胡蝶の夢に周となれるかを」（斉物論）拙稿『荘子伝』参照。　岸の上の胡蝶も、それが胡蝶なのか、帰ってゆく柳惲なのか、眺める朱樓の妓女なのか、それとも妓女を見やる李賀なのか・・・。胡蝶を、朝鮮本は「蝴蝶」とする。

○五〔酒盃　箬葉露〕　・箬葉露　呉興の西北に箬溪という溪川があり、両岸に篠竹が密生し、その竹と

渓水で醸した酒で、古来、銘酒として知られる。箬を、楽府詩集は「若」朝鮮本は「蒻」とする。ともによくない。

○六〔玉軫　蜀桐　虚し〕　・玉軫　玉で飾った琴柱。転じて琴。呉均「玉軫離徽有り」（同柳呉興烏亭集柳舎人）　・蜀桐　箜篌。「李憑箜篌引」（一〇〇一）参照。

○七〔朱樓　水陌に通ず〕　・朱樓　朱閣と同じく妓樓であろう。顧況「江南の渌水朱閣に通ず」（悲歌）　・水陌　水路、みなと。水陌を、錦囊集は「永陌」とし、蒙古本は「水脈」とするが、誤り。

○八〔沙　暖かし　一雙の魚〕　・さざ波をとおして日の光にぬるむ沙べに、一つがいの魚がぴったりと身を寄せあっている。

・そう結んで、魚が楽しんでいるとも、いないとも、言わない賀の詩に、論議をくわえるのは気がひけるが、「追和」とは、過去に一つの典型を見いだして、これに追い迫ろうとする古典主義的手法である。このような手法も、李賀にあっては、古典の規範性に合致するために取り上げられるのではなく、古典をどれだけ乗り越しうるかを測定するために用いているようにみえる。中国の歴史には、社会生活における規範を示そうとする意志が働いている。賀の詩は、そのような規範性から溢れこぼれるところに、具体的な個々の人間の悲しみを凝視しようとする。中国の人々にとっての規範の根源は天であった。その根源の天を否定して、人間の個々の力を認めようとするのが、賀の芸術のメタフィジクであることを拙稿「筆補造化天無功」（李賀論考）で指摘したが、「補悲」や「追和」にみられる「終わったところに始まる」手法も、そのメタフィジクにかかわるのであろう。

（作品番号　一〇一五）

春坊正字の剣

春坊正字剣子歌

〔春坊正字の剣子の歌〕　・この題を又玄集は「剣子歌」とする。　・春坊正字　東宮、すなわち皇太子付官庁に、左右春坊があり、その左春坊の司経局という図書館の、校閲係のひとつが正字で二人いて、従九品下。李賀の「秋涼詩」（三一六九）の副題に「正字十二兄に寄す」とあり、賀が従兄に寄せた詩。ここの正字はその従兄であろうと、鈴木が推測する。ただ用いる故事の多くが呉越に関するところから察すれば、この正字もまた呉興の沈氏のようなその地の人ではないか。　・剣子　つるぎ。子は接尾語。

（一〇一五）

先輩が匣に秘めたる三尺の秋水は　〇一 先輩匣中三尺水
かつて呉国の潭に入り悪龍の子を斬り捨てた　〇二 曾入呉潭斬龍子
隙もる月ときらめいて抜けば玉散り　〇三 隙月斜明刮露寒
おけばぴたりと練り絹の帯　吹いても起たぬ　〇四 練帯平鋪吹不起
鮫革の鞘の色古り浜菱の棘ととがって　〇五 蛟胎皮老蒺藜刺
山鳥の尾のながながと鴉鳥の鋩さきみだれ　〇六 鴉鵶淬花白鵰尾
これぞまさしく壮士荊軻の一筋の雄心だ　〇七 直是荊軻一片心
見せびらかすな春坊の文字詮索の役人たちに　〇八 莫教照見春坊字
組紐につけた黄金の飾り玉ずっしり垂れて　〇九 挼絲圜金懸麗蹤

光りいみじく藍田の硬玉もすっぱり切れようもの　　一〇 神光欲截藍田玉

そいつ引っさげ西に向かえば白帝たまげ　　一一 提出西方白帝驚

おうおうとその母鬼も秋の野に号泣しよう　　一二 嗷嗷鬼母秋郊哭』

〇一〔先輩匣中の三尺の水〕　・先輩　唐代には、文官試験に及第した人を、受験者から先輩と呼んだが、進士の合格者どうし、合格の前後に関わらず、敬称として、相手を先輩と呼ぶようになった。　・匣中　匣は箱。李益「雄剣匣中に鳴る」（夜発軍中）　・三尺水　剣の長さがほぼ三尺。その冴えた色を水に喩えた。

〇二〔曽て呉潭に入って龍子を斬る〕　・晋の周処は、村の厄介ものだった。川に蛟、山に虎がいて、人は三害といった。処は虎を刺し、蛟を撃った。蛟とともに流れ、三日たって帰ると、処が死んだと思った村人が祝っている。自分も嫌われていたことに気づき、発奮して大官となった。処が蛟を殺したのは呉の潭。先輩の剣は周処のあの剣みたいだ、というのであろう。潭は淵と意味は同じだが、唐朝の高祖の諱が「淵」だから、唐人はこの文字を遠慮して用いないのが例だった。例外はあるけれども。呉潭を文苑英華は「呉江」とする。

〇三〔隙月　斜めに明らかに　刮露　寒し〕　・隙月斜明　その剣身は、隙間からさしいる月の光が斜めに鋭く光るようだ。　・刮露　露を磨く。たぶん賀の造語で、刮露寒は拙訳のごとくであろう。

〇四〔練帯　平らに鋪けば　吹き起たず〕　・練帯　練り絹の帯。これも剣の比喩。　・平鋪　平らに敷く。　・吹不起　風に吹き起こされない。

○五〔蛟胎　皮老ゆ　蒺藜の刺〕　・蛟胎皮老　蛟胎は鮫の腹部の皮。たぶん剣の鞘をサメ革で造ってあって、老は、時代がついている。鞘ではなく、柄だという説もある。胎を又玄集は「鮎」とし、文苑英華は「螭」とする。皮老を蒙古本などが「老皮」とする。　・蒺藜刺　蒺藜はハマビシ。その実に堅い刺がある。サメ革の尖ったところはハマビシの刺のように鋭く堅い。

○六〔鵶鶏　花を淬む　白鵰尾〕　・鵶鶏　カイツブリすなわち鳰。その脂で刀を磨く。杜甫「銛鋒鵶鶏に瑩く」（奉贈太常張卿二十韻）　・淬花　淬は鉄を鍛えて焼きを入れることで、「にらぐ」とも「そめる」ともいう。その結果、鉄の表面に浮かび上がる模様を鈍という。ここの「花」は鈍のことである。・白鵰尾　鵰は白雉の一種。浙江の特産だったようだ。その長い白い尾のように美しい刃。

○七〔直だ是れ荊軻　一片の心〕　・直是　これこそ。直を文苑英華は「眞」とする。・荊軻　戦国末、衛の人で、撃剣を好み、燕の太子丹に秦王暗殺を頼まれ、王に面会し、匕首で刺そうとしたが失敗した。秦王は後の始皇帝。失敗はしたが荊軻は壮士の代表とされる。　・一片心　ひとすじの純粋な雄心。王昌齢「一片の冰心玉壺に在り」（芙蓉楼送辛漸）

○八〔照見せしむる莫れ　春坊の字〕　・莫教　一本に「分明」とすると文苑英華の注。教はここでは使役の助動詞。　・照見　照らし現わすことだが、拙訳のような意であろう。　・春坊字　注家の多くは、この剣を春坊に死蔵されている剣と見、「春坊字」は剣匣に記された「春坊」という文字で、それを剣身に映すな、と解釈する。だがこの剣は「春坊正字の剣子」なのだから正字個人の剣であろう。すると春坊の文字を映すというのも不自然に感ぜられる。それでここでは「春坊字」を春坊で文字の詮索をしているような先生方の意にとった。春坊正字である持ち主には失礼な言い方だが、持ち主が春坊などに

場違いの豪傑だとほめているのであろう。李賀自身、おのれの職の奉礼郎を軽蔑する気味がある。荊軻も、周処も、読書好きで、ことに処のほうは著述さえ残したから、文字を扱う職にだってつけられれば就いただろう。ただ、文字は見えるが、そこに拘わらぬ壮士だった。

〇九〔挿糸　団金　懸って　圏鬟〕　・挿糸　縒り糸で作ったベルト。　・団金　金色の丸い飾り。　・懸　又玄集は「垂」とする。　圏鬟　簏簌と同じで、垂れ下がるさま。

一〇〔神光　截らんと欲す　藍田の玉〕　・神光　後漢書安帝紀「帝邸第に在りしより、しばしば神光あって室を照らし、また赤蛇あって牀第の間に盤る」　・欲截　截断しうるほどだ。　・藍田玉　藍田は、藍田県（陝西）にある山名で、漢書地理志「京兆藍田県、美玉を出だす」というように宝玉の名産地。その玉は堅い。「老夫採玉歌」（二〇八六）参照。

一一〔提出すれば　西方　白帝　驚き〕　・白帝　五天帝の一。五行では白、季節では秋に当たり、西方を司る。秦は白帝を祠った。漢の高祖が、まだ亭長だったころ夜行して、先導が、道に大蛇がいるから引き返そう、というのを、進んで剣で斬った。後から来た者が蛇のいた処で老婆が泣いているのを見た。聞くと、わたしの子は白帝の子で、大蛇に化けていたのを、赤帝の子が来て斬り殺した、と言った。聞いて高祖は自負した。史記、高祖本紀のその話を枕において、東南呉地のこの剣を引っ提げてゆけば、西方の神白帝も驚き恐れるだろう、というのである。

一二〔嗷嗷　鬼母　秋郊に哭せん〕　・嗷嗷　泣き声。　・鬼母　文苑英華などは「鬼姥」とする。いずれにしても白帝の子の母を指す。　・秋郊　秋の野。

（作品番号　一〇一六）

深夜の貴公子

貴公子夜闌曲

〔貴公子夜闌曲〕　・夜闌　夜が闌ける、すなわち夜更け。王昌齢「夜闌けたり須らく尽く飲み、百年の心に背くなかるべし」（少年行）杜甫「夜闌けて更に燭を秉り、相対すれば夢寐の如し」（羌村）・夜闌曲というと楽府のようだが楽府詩集にこの題は見えない。夜を歌った楽府には「夜夜曲」「秋夜長」「秋夜曲」「夜坐吟」「遙夜吟」「寒夜怨」「寒夜吟」などがあり、夜坐吟には李賀の作もある。「貴公子夜闌曲」はそのいずれとも違う。それで方世挙は断片だろうと推測する。推測は鋭いが、しかし、短いながらこのままでもふしぎに瀟洒な味わいがあって珍重すべきだろう。

（一〇一六）

たおたおと沈香くゆり　〇一 裊裊沉水煙
烏が啼いて　すっかり闌けた夜の景色　〇二 烏啼夜闌景
くねる池に芙蓉の波がさざらいで　〇三 曲沼芙蓉波
腰めぐる帯の白玉の冷たさ　〇四 腰圍白玉冷

〇一〔裊裊　沈水　煙り〕　・裊裊　嫋嫋と同じで、しなやかに、ながく、まとわりつくようなさま。王昌齢「滄波風裊裊」（何九於客舎集）　本によって似た異体字を使うが意味の上では変わりはない。

・沈水　沈香のこと。インドや東南アジアに産するジンチョウゲ科の植物から採れる香料のうち重くて水に沈むものが上質で、これを沈水、沈水香などといい、その香りは清婉で中国人の使う香料の最高のものとされた。

○二〔烏（烏）は啼く　夜闌の景〕　・烏啼　烏を明代以降の刻本や注本は「烏」とする。古い板本に従うなら「烏」とすべきだろうが、ここでは「烏」を採る。烏啼は王籍「烏啼いて山更に幽なり」（入若耶渓）王維「烏啼いて山客猶お眠る」（田園楽）などのように朝や昼の詩に多く現れ、李賀の作でも青鳥という神話の鳥以外はすべて朝か昼のものとして使われている。　・夜闌景　闌は、盛りを過ぎた状態。夜闌といえば、起きていた人たちもそれぞれの所へ退いた後。そのひっそりとした、しかし残っている人にとっては微妙な夜景、それが夜闌の景である。

○三〔曲沼　芙蓉の波〕　・曲沼　曲がりくねった池。杜審言「芙蓉曲沼の花」（和韋承過義陽公主山池）・芙蓉　はちす、すなわち蓮の花。蓮は音が通うことによってしばしば憐（恋）の象徴とされる。ここでも、曲沼とともに目の前のそのものかもしれぬが、また艶美な暗喩ともとれないことはない。

○四〔腰囲　白玉　冷やかなり〕　・腰囲　腰のバンド。　・白玉冷　夜がふけたため腰に巻いた帯の白玉が肌に冷たく感ぜられる、というのだ。感じる人を、貴公子自身とするのが一般だが、表現の表には隠してある、貴公子に寄り添うひととするほうが「夜闌曲」の題にふさわしく、そのひとは女性と思うが、あるいは男性だったかもしれない。中国では男性貴人の同性愛が歴史に公然と記され、六朝や唐代には謳歌される気味さえあった。肌に直接感じる夜の冷たさは、賀は十二月楽辞七月にも「僅かに厭う舞衫の薄きを、稍や知る花簟の寒きを」と歌っている。

（一〇一七）

雁門太守の歌

雁門太守行

〔雁門太守行〕・雁門は代州（山西）で、そこに雁門山があり、山に要塞が築かれていた。州郡の長官を太守というが、ここでは雁門要塞の司令官としての太守を歌う。「行」とは、詩の文体の一つで、その調子が自由に歩行馳走して、書体における行書のようなのをいう。楽府詩集に「雁門太守行」があり、現存する最古の作は、雁門とはまったく関わりがない。おそらく更に古いものに雁門の太守を歌ったものがあったのだろう。ついで梁の簡文帝と褚翔が雁門の守備戦を歌い、題にふさわしく、ついで李賀のこの作となる。簡文帝らのは勝利が暗示されているが、賀のは、玉砕直前の悲壮な決意がのべられる。以後、唐の二詩人の作も敗戦の歌であり、賀のはその〃勝敗〃を分ける要となっているわけだ。先行する楽府としてはむしろ梁の呉均の「戦城南」に学んでいるように感ぜられる。賀の詩における「雁門」は、地理としての雁門よりは《不利な戦場》の象徴とみるべきだ。かれにはほかに「呂将軍歌」のような不遇の将軍を詠じた作がある。五世の祖の李神通が、唐の開国の功労者でありながら、太宗によって《敗戦》将軍と位置づけられたことに関わりがあるだろう。拙稿「李神通」（李賀論考）「唐の太宗」（李賀研究五）「北中寒」（李賀研究一一）など参照。

（一〇一七）

〇一 黒雲壓城城欲摧
〇二 甲光向日金鱗開

黒雲　長城を圧し　長城は　破摧しそうだ
甲冑の光　日にむかい　金鱗ひらく

角笛の声　秋色のうちに天に満ち
要塞の上の　臙脂が　夜の紫に凝固する
半ば巻いた紅の旗　易水の大河に臨み
霜重く　陣太鼓寒く　声沸きたたぬ
黄金台上にわたしを招いた　君の知遇に
報ぜんため　玉龍の剣ひっさげ　いざや死のう

〇三　角声滿天秋色裏
〇四　塞上燕脂凝夜紫
〇五　半巻紅旗臨易水
〇六　霜重鼓寒声不起
〇七　報君黄金臺上意
〇八　提携玉龍爲君死

〇一〔黒雲　城を圧し　城摧けんと欲す〕　・黒雲　呉均「黒雲趙樹を蔽し、黄塵隴垠を埋む」（戦城南）常建「百尺旌竿黒雲に沈む」（張公子行）呉正子は「この黒雲は乃ち城気なり。軍書に、城を攻むるには必ず城気を観ず、もし黒雲の気あらば、城必ず破る、と。ここに城摧けんと欲すという、これなり」という。その「城気」が普通の黒雲であってもかまわないだろう。　・壓城　雲が長城に垂れ下がっている状態をいっている。

〇二〔甲光　日（月）に向かって　金鱗　開く〕　・向月　文苑英華などが「向日」とし、それがよい。この句につき宋の王安石が「黒雲が城を圧しているときに日に向かう甲光があるものか」と否定し、それに対し明の楊愼が次のように擁護する。「およそ軍隊が城を囲んでいる時は必ず怪雲変気があるものだ。わたしがさきの動乱で、封鎖された城市にいたとき、日暈が二重になり、黒雲が蛟のようにその側にあるのを見て、李賀の詩が事物の描写にすぐれることを信じた（升庵詩話一〇）　筆者も、敗戦直前、台湾でこれと極似する光景をたびたび見た。蔡琰「金甲日光に耀く」（悲憤詩）　・金鱗開　日光が甲

胄に反射し金の鱗が散開したように見える。

○三〔角声　天に満つ　秋色の裏〕　・角声　角笛の声。近代の軍隊のラッパに当る。宋蜀本は「鬼声」とするが、誤り。

○四〔塞上（土）の燕脂　夜紫　凝る〕　・塞土　蒙古本などが「塞上」とし、そのほうがよいようだ。・燕脂　楽府詩集などが「燕支」とし、日本では一般に臙脂という文字をつかう。意味は同じく、黒みを帯びた赤。張掖（甘粛）の東南に燕支という山があり、化粧に使う良質の紅を産した。山の名にちなんで燕支といい、脂に混ぜるから燕脂といい、やがて臙脂というようになった。ここのを要塞の壁土の色とする説と、地平線に立ち上る殺気の色、とする説がある。　・凝夜紫　王勃が「煙光凝って暮山紫なり」（滕王閣序）というように、日暮れには大気が臙脂から紫に変わるから、方世挙が「黒雲日に映じこの怪光紫気あり」というのも自然だ。紫に変わるのを要塞の壁土だとする説があるが、大気が紫になれば壁土もその色に塗り込められるから、区別することはない。

○五〔半ば紅旗を巻いて易水に臨む〕　・半巻　巻を宋蜀本などは「捲」とする。　・易水　易県（河北）から東流する大河。燕の太子丹がここで荊軻を秦への刺客として送り、荊軻が「壮士ひとたび去ってまた還らず」と歌った。またここは古来しばしば戦場となった。

○六〔霜重く　鼓寒く　声起こらず〕　・鼓寒声　唐詩紀事などが「鼓声寒」とするが、よくない。触覚と聴覚を転移することによって、この詩句は、中国の詩には希有な表現とその効果をもたらした。

○七〔君が黄金台上の意に報い〕　・黄金台　李白「燕昭郭隗を延き、遂に黄金台を築く」（古風）戦国時代、燕の昭王が郭隗のために、台を築き黄金をおき、師事した。ちょうどその郭隗のように国士とし

て招いてくれた君の厚意に報いるため。というほどの意。黄金台は、易水の東南にあった。

○八〔玉龍を提携して　君が為に死せん〕　・玉龍　剣。王初「剣光雪を横たえ玉龍寒し」（送王秀才謁池州呉都督）王初は賀とほぼ同時の人。玉を、宋蜀本は「王」とし、龍を文苑英華は「環」とし、その注に「拏」とする本があるという。　・為君　呉均「君が為に意気重し」（戦城南）

・この詩について、唐の張固の幽閑鼓吹に次の挿話を載せる。李賀が詩集をたずさえ韓愈を訪問した。愈は国子博士で洛陽勤務だった。ちょうど客を送り出したところで、とても疲れていた。門人が賀の詩集を渡すと、帯を解きながら開いて、巻頭の雁門太守行の「黒雲圧城城欲摧、甲光向日金鱗開」とあるのを見ると、すぐに帯を着けなおし、賀を迎え入れさせた。李賀と韓愈の初対面については王定保の摭言に別の挿話を載せ新唐書がこれを採用するが、張固の語るほうが事実に近く感じられる。事実ならば、八〇七年、李賀一七歳、韓愈四〇歳。「雁門太守行」はそれ以前の作である。

※前号正誤　第一六七号　一七頁　二行　観察御史　→　監察御史

和田利男著　『漱石文学のユーモア』　1995 2 23　原田憲雄

一九四七年に人文書院から発行された同じ題の本を、表記を改め、めるくまーる社から再発行した。先立つ『漱石漢詩研究』とともに漱石研究史上、特異な名著。漱石のユーモアが、性格・基盤・諸相の各面から解析される。他の理論で漱石を裁断するのではなく、対象のうちにある特色や秩序、それ自身の理論をたどることによって、おのずから漱石の長所や欠点を浮かび上がらせ、短所をも含めた全体が生きた美質として輝くように説き進められる。よき《批評》とは、まさにこのようなものであろう。

故郷

95 02 21　　原田　慶

ころばないように気をつけて
と言いおいて玄関を出る
バスの停留所まで来て
川原を見おろすと
冬枯れの草むらを分けて
細い流れが光っている
ミゾソバの茂みから
ガマの穂が突き出していたり
用水路の流れ落ちる下で
白サギが魚を待っていることもあるが
見渡す田の辺りに
人の姿はない

別れてきたばかりの母に何か
言い忘れたような気がして
引き返そうと思うけれど
大きく息を吐いて
遠い山を見る

田を渡ってくる風も
曲がりながら行く畦道も
そのままなのに
鋤や鍬を使う人を
見ることはない

この季節
麦の畝たてをしていたのだろうか
菜種の花を摘みはじめる時だったろうか
すぎ去った遠い記憶だ
つらい日々を美しかったように思い
老いた母のところへ帰りたくなる

バスが走り出すといつも
田を一枚ずつ数え
畔に根をはる草々を見ようとして
窓ガラスにひたいをすりつける
故郷でわたしにやさしいのは
もう自然だけなのだけれど

松花堂庭園へ

1995 03 11　原田　慶

走井餅というのは大津名物と形も味も同じだったが、案内してもらった森山さんの話によると、弁慶が大津から八幡まで運んできたという言い伝えがあるそうである。その茶店を出て、バスに乗ったわたし達は、松花堂が八幡さんのすぐ近くだと思っていたので、二十分余りも行く間、何となく浮かぬ顔を見合わせていた。森山さんもそこへは行ったことがなかったらしい。おまけにわたしと小谷さんはそこをお弁当屋さんだと思い込み、昼食をするのを楽しみにしていたのである。誘ってもらったときに、松花堂弁当発祥の地だと説明されたことが、二人とも耳に残ったのだった。庭園の前の大芝という停留所でバスを降りた。京都府指定の史跡という看板が立っている。こんなところでお昼を食べて、とほうもなく高価だったらどうしようと、わたしは財布の中身を考えた。入口のほうへ歩きながら「さあどんなご馳走が頂けるのでしょう、楽しみですね」と小谷さんがほんとうに嬉しそうに言うので、心配ながらもわたしは「そうですね」と相槌を打つ。「えっ？ここは食事をするところと違うのよ、お庭を観るんですよ、二人ともここでお昼を食べると思ってたの」「違うの？松花堂弁当発祥の地やて言うたやんか、楽しみにして来たのに」。わたしもほっとしたものの少しがっかりした。中へ入ると正面に長い竹垣がうねるように二枚、平行にずらして並べた屏風のように立っているのが見えた。受付事務所、売店、駐車場などと庭園を仕切っていて、二枚の間を通って庭に入って行けるようになっている。手前の方側左へずらしてあるのが九頭竜垣、向こう側右、長く伸びているのが光悦寺垣、併せて双竜垣と名づけられている。入園料を払っ

て中へ入る。すぐに掃除をしていた職員の人にお願いしてサザンカの前で三人並んで記念写真を撮った。歩道をゆっくり歩いて行くと、さまざまな竹や笹が植え込まれている。全国から三十四種類が集められているという。小町竹は竿の中がつまっているというめずらしい品種、蘇芳竹は若竹が秋ごろから紅色に変化するという美しい竹、金明孟宗竹は黄金色の竹だけれど、かぐや姫はこの竹ではなくて真竹から生まれたそうである。

また竹垣の種類も集めてあって、これがみごとである。寒竹あやめ垣、矢止垣、竹枝穂垣は美しい。昭乗垣はたけのえだをびっしりと横に太い竿を縦にしてきっちりと編み、長々と立てたみごとな垣根。竹垣は十八種類、他に萩、黒文字などを使ったものも入れると二十三種類になる。金色の竹の近くを流れる小川にはカワニナがたくさんいて、その歩きまわった跡が絵地図のように水底に光っていた。この庭園のすみずみまで磨いたほどの手入れにはまったく感心する。

外園と内園があり、外園には主に竹や椿が植えられているが、四月上旬にはつばき展があるそうである。内園は、この庭園の主人だった松化堂昭乗の草庵「松花堂」や書院を取り囲む苔庭、枯山水の築山、庭石や灯籠を配した純日本式庭園である。「松花堂」は小さな茶室で、月や太陽を表象する絵や文字などがあり、真言密教的な宇宙を現わしているらしかった。狭い場所で、何もないのに何もかも揃っている不思議な空間だった。その庭にムベの棚があり、そこで仕事をしていた人がこの庭園を受け持っている所長さんだったらしくて、小谷さんはムベのことを説明してもらってしきりに感心している。これほどにと思うまでよく手入れされているのである。外園の奥の方に資料館もあって、そこに松花堂弁当のもとが展示してあった。それは昭乗が愛用していた木製の絵具箱なのである。四角の盆のような箱で、中が四つに仕切ってあり、それぞれのなかに花や鳥が描かれている。これをモデルにした入れ物に料理を盛り付けたのだそうである。松花堂昭乗という人をわたしは初めて聞いたの

だけれど、『都名所図会』の補注によると、昭乗は江戸初期の僧、書画家。寛永三筆の一人。茶道、作庭にも長じ、石川丈山、林羅山、小堀遠州、木下長嘯子らと交友、俗名中沼式部。堺の人、喜多川氏の出。近衛信尹に仕えたが、慶長五年男山に登って八幡宮滝本坊の社僧となり、寛永四年僧職となる。同十四年、坊の傍に隠居所を営み、松花堂と号した。同十六年寂、年五十六。松花堂茶室・泉坊書院は八幡町大字志水に移されて現存する。真言密教を学んだ阿闍梨法印だったのだそうである。

同じ本の絵地図をよく見ると、大塔（大日、多宝の二尊を安置）琴塔（毘沙門天）太子堂（南無仏、阿弥陀仏）薬師堂、阿弥陀堂、元三大師堂、愛染堂、本地堂（阿弥陀仏、観音、勢至）宮本坊（開山行教和尚の坊）滝本坊（昭乗の坊）大乗院（千手観音）足立寺（弥勒仏）など仏教寺院が数多く建っている。明治初年の神仏分離によってこれらがすべて取り壊されたと書いてある。この実行の徹底しているのにおどろく。伏見稲荷、北野神社その他多くの所でも同じことがあったわけで、長い歴史をこれほど壊滅したことには悲しさを感じる。

松本明美さんに『とはずがたり』のことを教えていただいて思い出した。この自伝的物語の作者二条は久我雅忠の娘で、一二五八年に生まれ、幼名を「あかこ」といった。村上源氏の系統だったので、八幡神によく参詣したり参籠したりしている。後深草院の女房だったが、理由があって御所から追放されて出家し、西行に憧れて旅をした。旅立つにも八幡の本地仏である阿弥陀三尊に誓いを立て、京に帰るとまた参詣している。後深草法皇の亡くなる前にも病気平癒を祈願して参籠した。このような形で信仰された八幡神社も現在その様子をうかがわせるものはあまり残っていないように思う。松花堂昭乗は二条より三百年以上も後の時代の人であるが、その人の茶室や書院が移築、保存されていることの意義は大きい。庭園を出て、バスで少し、坂を越えるとそこは枚方市楠葉であった。やっと遅い昼食にありついて、わたし達は今日一日に満足した。